

め全選手の活躍に悔いはなかった。松陵会などのバックアップも立派だった。

「要は、青春さ賭げる意気込みの問題でねが……」

太田監督は情熱を燃やす。新しい選手が次々に生まれ、明日に向かってがんばる。いつの日か、あの深紅の大優勝旗をこの手にと——。

昭和40年3月卒業

第35期

昭和38年秋季～39年夏季

チーム紹介

総合力、昨年をしのぐ

春からの戦績は12勝3敗。チーム打率3割2分でどこからでも打てるチームになった。総合力では、昨年を上回る実力で春の全県大会と東北大会に優勝、東北代表として新潟国体に出場し優勝校博多工と五分の試合をした。

エース渡辺は下手投げ。打者の手元で、浮きあがる球を得意とし、さらに沈む球もマスターするなどうま味のあるピッチングをする。国体では二試合で43人を飛球で打ち取り“フライ製造投手”的異名をとった。

内野は穴がない。外野もそろって足が速く守備範囲が広い。打線は佐々木、渡辺、米沢のクリーンアップトリオが長打力をもっており、下位打線も好打者ぞろい。大会でも有力な優勝候補といえそうだ。

◎昭和38年

・秋季県北

能代5-0大館鳳鳴

能代14-1花輪

能代11-0能代農

決勝 能代1-3能代工

(投)	渡 辺③
(捕)	加 藤③
(一)	佐々木③
(二)	熊 谷②
○(三)	米 沢③
(遊)	田 山②
(左)	大 谷③
(中)	畠 山③
(右)	柴 田②
補	山 谷②
〃	森 ②
〃	鶴 木③
〃	小 林②
〃	大 沢①

・全県選抜

能代0-4秋田工

◎昭和39年

・春季県北

能代10-0合川

能代2-0能代商

能代4-12能代工

・全県選抜

能代5-2秋田商

能代5-0角館

決勝（初優勝）

能代3-1能代工

・東北大会（青森市）

能代10-0青森商

能代3-1日大山形

決勝（初優勝）

能代4-0青森高

・国体（新潟）

能代3-2東邦（愛知）

準々決勝

能代0-2博多工（福岡）

・能代選抜

能代0-7秋田工

・全県大会（36校出場）

能代8-1秋田市立

能代1-0秋田

能代4-2秋田商

代表決定戦

能代9-2能代商

4回戦 能代4-2秋田商（延長11回）

能代	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	4
秋田商	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	2

（能代）渡辺一加藤

（秋田商）小松・田中・小松一木田橋

・西奥羽大会（秋田市）

能代1-0山形南

決勝 能代2-3秋田工

能代	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	
秋田工	1	0	1	0	0	0	0	0	1	×	3	

（能代）渡辺一加藤

（秋田工）三浦一鎌田

〈部長〉小笠原恒太郎

〈監督〉太田 久

〈部員〉3年生

◎米沢 正裕 佐々木幸綱

鵜木 利昭 渡辺 節朗

加藤 隆 大谷 敏穎

畠山 洪喜

能代、博多に惜敗

■国体高校野球

準々決勝

博多工	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2
能代	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

（延長11回）

延長11回能代高はついに力がついた。試合は博多橋本、能代渡辺両投手の好投で最初から息づまるような投手戦。橋本は快速球を外角低めに決め、一方の渡辺もスピードでは橋本に一步ゆずったが、これも慎重なピッチングで博多打者はほとんど凡飛に打ちとり、6回まで両軍無安打。7回に両軍チャンスはあったがいずれも得点に結びつかず延長戦にもつれ込んだ。11回博多は一死少弾は中前安打、続く池田が中堅越えの三塁打。野手中の継失に乘じみずからもかえり決定的な2点を上げた。能代渡辺は後半疲れたためスピードを欠いていたが初出場ながらよくやった。



セーフかアウトか
決勝秋工戦 7回表1死 柴田突入り判定はアウト

フライ製造投手

能代高校渡辺節朗投手は、好投のかいもなく敗戦投手となつた。しかし彼のピッチング内容はなかなかりっぱで“フライ製造投手”的異名までつくった。

1回戦の対東邦戦では、飛球19本でゴロはゼロ。2回戦の対博多工戦では、4回の倉田に三塁ゴロを許したのが2試合を通じて初めてのゴロ。その後も次々と飛球に打ち取り、2試合で計46本の飛球に打ちとつた。

相手の博多工（福岡）の佐藤監督は「高めのタマにスピードがない割りには伸びがあるからでしょう。しかし渡辺君はいい投手ですね。まったく苦戦しましたよ」とニガ笑い。

西奥羽代表決定戦のドラマ

渡辺 節朗

昭和39年度の我等戦士達は、前年エース簾内さん、キャプテン菊谷さんはじめ諸先輩が成し遂げた甲子園大会初出場の勢いを戴き、春季県大会に優勝、東北大会初優勝そして国体出場（東京オリンピック年で6月開催）ができ、うれしい思いを多く体験しましたが、なんと云っても、西奥羽代表決定戦2試合が未だに頭から離れません。

県大会決勝まで勝ち進んだ、能代と山形南、秋田工と日大山形の組み合わせにより甲子園への最終切符を目指して死闘がくりひろげられました。

山形南戦は、私も調子良かったが相手の左腕市川投手をなかなか攻略できないまま、8回までお互い2安打に抑える投手戦でしたが、9回裏能代の攻撃、先頭森君が一、二塁間を抜き出塁、三番佐々木君がヒットエンドランでレフトオーバー二塁打、私は敬遠され、無死満塁、五番米沢主将があのサヨナラ満塁ホームランとなりそうだった、レフトポール際フェンス直撃のサヨナラ打を放ち、決定戦の舞台に押し上げてくれた勝負強いキャプテンの素晴らしい一打でした。

次の日は、日大山形に勝った秋田工、秋田県代表同士の対決。新人戦・能代選抜で完敗した相手でしたが、とにかく全員で力を出し切る戦いをしようと臨んだ決定戦でした。私も意識したのか初回、3回に1点ずつとられてしまい追う展開となってしまったが、中盤は硬さがほぐれ、0-2で持ちこたえ、最高のヤマ場となった7回表の攻撃熊谷（小笠原）君が中前打で出塁、加藤君が送り、1死二塁で田山君が右中間二塁打で1点かえし、そしてトップ柴田君も右前打と続きすかさず盗塁、1死二、三塁一気に逆転の場面となりました。2番森君は期待に応え、前進守備の三遊間を抜きまずは同点。しかし、二塁走者の柴田君も本塁に突入ヘッドスライディング、もうもうと砂煙が上がったホームベース前、セーフだ!!逆転だ!!しかし、小室球審の手が上がりアウトの判定。（観衆がグランドに飛び降り抗議するなど、今でも誤審で負けたと思っている悪夢のシーンであった）

この回は2点で終わり同点、8回表も先頭の私がヒットで出塁、1死二、三塁と攻めたが痛恨のスクイズ失敗。三塁走者で挟まれ本当に悔しかった。しかし、それを引きずらないようにマウンドへ。1死二塁打者五番鎌田の場面、ここで私の高校での“一番の失投”をしてしまったのです。自信のあるインコースからのカーブで打ち取ろうと思いきりひねったつもりだったが、肩口から10~15cmぐらいしか曲がらず甘く入ってしまい（アッと声を出したくらい）打球はレフト線に運ばれ、決勝点となる1点を与えてしました。

とうとう2対3で最終回の攻撃、先頭の加藤君

何が何でも塁に出るというファイターの根性を見せ、自ら顔面（頬骨）に死球で一時失神状態となり、ランナー交代となつたが、気が付いた加藤が試合に出てくれと監督に泣いて頼んでいる姿には、ナインはもとより観衆の皆さんも気持が高ぶったのではないか。この内で最後の最後まで頑張ったが、むなしく終了のサイレンが鳴つた。悔しい!!俺が打たれなければ!!自責の念で大いに泣いた。

○ドラマの感想

ドラマの舞台に上がるまでになれたのは、太田監督の御指導の賜物であることは云うまでもありません。野球への情熱、精神力の強化会得及びチームワークの大切さを教授して頂き、同士も各自応える努力した結果であったと思います。

最後の試合で監督に応えられなかった2つのポイントがあったと思います。一つは私の“一球の失投”打ち取るべき内角カーブが曲がらず高めに投げてしまったこと、一球入魂の欠如と精神力の弱さでした。もう一つは、逆転シーンの判断力が弱かったこと、レフト前ヒット、レフトの前進処理、次打者の打順（3番）、止めれば同点なお一死一・三塁、同じチャンスで攻撃が続き、あの小室判定も無く、スクイズ失敗も加藤君のデットボールも無かった展開だったので!!と思いました。

私は今中学生クラブチームの監督をしていますが高校でのいろいろな体験を生かし、子供達に野球を教えております。最後に、田中さん、大山さん、伊藤さんの3コーチに対しても、敬意を表し、40年前の忘れられないドラマを書いた筆を下ろします。

闘 魂

加 藤 隆

能代高校硬式野球部を卒業してから39年目を迎える今日、当時の記憶は薄れる一方となる年齢となりました。

遠くなった当時を振り返ってみれば、昭和38年夏の甲子園で練習が出来たこと、翌年の39年東北大会を勝ち抜き、東北代表で「国民体育大会」に出場し、愛知の東邦高校に勝利し、九州の博多工業高校に敗れたが、全国高校野球レベルでベスト8になれたことなどが思い出されます。

そして、今でも鮮明に覚えていることは、高校生活最後の夏、昭和39年夏の大会、西奥羽大会決勝戦。相手は秋田工業高校、1点リードされて迎えた最終回。

先頭打者として打席に向かう準備をしている自分に、太田監督が近寄って来た。

この夏の大会ヒットの出ていない自分は、先頭バッターとしてなんとしても壘にでなければならないと思っている自分に、太田監督は、「3年間の結晶をここで出すんだ」とアドバイスしてくれた。

なんとしても壘に出ようと考えていたが、頂いたアドバイスで、何をすべきかが明確になった。

「一球入魂」「闘魂」そして「熱と力と団結が俺達の全てだ」。

3年間で能代高校硬式野球部から学んだことをこの打席で発揮するんだ。

ボールから絶対に逃げるな、向かって行くんだ、向かって戦うのだ。

そう考えたら、ヒットを打とう、バットを振ろうという気持ちは微塵も湧かなかった。

ただひたすらにボールが大きく見えるチャンスを待ち続けた。ボールカウントは頭になかった。

来た。大きく見える。体が自然に反応した。痛みも感じなかった。どこでボールを捕えたのか覚えていない。

よし、壘に出れる。その瞬間、スーと気持ち良くなった。

気がつき我に戻った時、周りが大騒ぎ状態であった。

そこで、はじめてわかった。顔でボールを捕えたことが。

いま思えば、3年生になって使われるようになってから、勝ちたいと思って試合に臨んだことは

なかった。

毎日、毎日の練習したことを出そう、学んだことを発揮しよう、その思いだけで戦っていた。

試合でのバント、スクイズなどは全て一球で決めた。

すばらしいチームメイトと共にどこにも負けないだけの練習をやっていたからだと思う。

すばらしい監督さん、すばらしい指導者、すばらしいチームメイトに会え、すばらしい思い出を作ることができた。

当時を糧に、自分はいま有ることを感謝している。

最後に、現、能代高校硬式野球部の諸君に伝えたい。

能代高校硬式野球部の試合は、技術で戦うのではない、「魂」で戦うのだ。

「闘魂」こそが能代高校硬式野球部の野球なのだ。

魂を培うための練習をしなければ、伝統は消えてしまうでしょう。

能代高校硬式野球部の歴史を語るうえで必ず語らなければならない話題が、能代高校硬式野球部の「闘魂」である。

能代高校硬式野球部の「闘魂」は、能代高校硬式野球部の「魂」である。

能代高校硬式野球部の「闘魂」は、能代高校硬式野球部の「命」である。

能代高校硬式野球部の「闘魂」は、能代高校硬式野球部の「心」である。

能代高校硬式野球部の「闘魂」は、能代高校硬式野球部の「命」である。

能代高校硬式野球部の「闘魂」は、能代高校硬式野球部の「心」である。

能代高校硬式野球部の「闘魂」は、能代高校硬式野球部の「命」である。

能代高校硬式野球部の「闘魂」は、能代高校硬式野球部の「心」である。

能代高校硬式野球部の「闘魂」は、能代高校硬式野球部の「命」である。

能代高校硬式野球部の「闘魂」は、能代高校硬式野球部の「心」である。

能代高校硬式野球部の「闘魂」は、能代高校硬式野球部の「命」である。

能代高校硬式野球部の「闘魂」は、能代高校硬式野球部の「心」である。

